

◎基礎学力の定着と思考・判断・表現力の育成を目指します

○「わかる授業」と言語活動の充実

1. 授業時間数を確保し、ゆとりを持った丁寧な授業を実践します。

教職員		計				集計							
A	授業実施率の確保も大切だが、実施率にこだわらず、生徒の理解度、到達度を高めることを第一としてゆとりのある授業時数の確保を心がけている	1	A	5		A+B	12				達成目標	80%以上	
B	90~100%の授業実施率の確保と、生徒の理解度、到達度との兼ね合いを意識して授業時数と授業の進め方について常に意識し計画的に授業実践している		B	7		%	80				来年度にむけての改善方策案		
C	授業実施率をある程度気にかけているが、学習内容と時数、生徒の実態との兼ね合いについてもう少し意識しなければならぬと感じる		C	3	合計	C+D	3				中間評価では高い満足度を示していた1年生が、上級学年と同じレベルにまで落ちたことは、学習内容が濃くなり、消化不良を起こしている生徒が増えてきたと言えるのではないだろうか。 全校的に約25%に生徒が授業に対して「ゆとり」「わかりやすさ」「授業時数」を求めている。4人に一人という割合は、見過ごすことのできない数字だと言える。そこで次の3点を提言したい ・来年度の教育課程を、一層の授業時間の確保重視型とする =朝学習の充実、総合的な学習の時間見直しなどが考えられる ・補充体制(長期休業中と放サポ)の見直し。 =計画的な実施と内容の工夫が求められる ・以上の取り組みをさらに焦点化するため、生徒アンケートを実施し、生徒の求めているものが「時間」なのか「わかりやすさ」なのか「ゆとり」なのかを調べる。また教科ごとの特性も調べる。		
D	生徒の理解度、到達度を高めるための工夫と授業時数確保について、普段意識できていない		D	0	15	%	20						
生徒		1年	2年	3年	計	生徒							
A	全体的に授業の進み方にはゆとりがあり、丁寧な授業がほとんどで、授業時数も十分だと思う	A	12	8	10	30	A+B	45	50	39	134	以上	
B	進み方にはゆとりのある授業が多く、丁寧な授業もあり、授業時数もちょうどよいと思う	B	33	42	29	104	%	75	70	75	73		
C	進み方にゆとりがなく、わかりにくい授業もある。授業時数がもう少し多いといいと思う	C	15	17	12	44	合計						
D	進み方にゆとりがなく、わかりにくい授業が多い。全体的に授業時数がもっと必要だと思う	D	0	4	1	5	183						

来年度に向けての具体的提言

- ・授業時間の確保には引き続き努めるが、授業時数を大幅に増やすことは物理的に難しい。
- ・「わかる」「できる」授業が提供できれば、授業時数に頼る必要もない。また分かりにくい授業をいくらやっても生徒は飽きるばかりだろう。
- ・限られた時間の中で、生徒の意欲、集中力を高める授業をつくっていくことが、24年度からの新課程実施にむけての準備という視点からも、当面の重要課題であろう。
- ・以下の2点について、来年度の研究の柱として、また生徒会での取り組みとして検討していく。
 - ①教師自身が普段の授業をどのように効率的に、魅力的にしていけるか、授業技術を高める取り組み
 - ②生徒自身が学習に対して目的意識を持ち、集中して授業を受ける意識をどう高めていくか、その方策の研究と実践
- ・生徒アンケートについては、「何を求めているか」ではなく「学習に対してどんな意識を持っているか」について調査し、来年度の研究実践にむけての手がかりとしてはどうか。

4. 日常生活の各場面や郷土の歴史文化、先人を教材に取り入れ、生活に根ざした学びの場を作ります。

教職員		4				計	教員	集計				達成目標	80%以上	
A	教科の特性に応じて ①日常生活の教材化 ②郷土の歴史文化の教材化 ③郷土の先人、偉人の教材化 ④その他実生活の各場面を学習に取り入れるのうちどれかに計画的に取り組んでいる	4				A	8	A+B	12					達成目標
B	上記の学習活動のうちどれかについて、今年度内に取り組む計画がある。	4				B	4	%	86				来年度にむけての改善方策案	
C	上記の学習活動のうちどれかについて今後検討し取り組んでいく	2				C	2	C+D	2					新学習指導要領では全教科において「伝統と文化」に関する学習と、「実生活に関連した」学習を取り入れるため、それぞれの地域に応じた教材の開発が求められます。 また同時に実施される「敦賀スタンダード」の実践でも、学力の向上と郷土教材の開発・実践による郷土を愛する心の育成が求められます。
D	上記の学習活動について取り組む予定がない	14				D	0	%	14					
生徒		1年	2年	3年	計	生徒	1年	2年	3年	合計	これらの内容はそのときが来てからすぐにはできるものではなく、十分な準備と試行の上に立って初めて成立するということも言うまでもありません。 学校に求められるこれらの新しいニーズに応じるため、郷土に関する教材の開発や意識の高揚を意識していくことが必要。			
A	毎日の学習活動(授業)の中で、次のどれかについて学習する教科が3つ以上ある ①毎日の生活に関する学習 ②郷土の歴史や文化に関する学習 ③郷土の先人、偉人に関する学習	A	9	13	13	35	A+B	40	47	33		120		
B	上記①～③に関する学習を行う教科が2つ以上ある	B	31	34	20	85	%	67	66	63		66		
C	上記①～③に関する学習を行う教科が1つ以上ある	C	17	21	16	54	合計							
D	上記①から③に関する学習を行う教科は一つもない	D	3	3	3	9	183							

来年度に向けての具体的提言

- ・現在、学び育み委員会で取り組んでいる敦賀スタンダードに基づく授業実践が、24年度から始まる。具体的な実践にはその動きを見守る。
- ・現状でも、各教科で「郷土に関する学習」「郷土に関係した教材の開発」を行い、実際に授業で扱っているが、生徒の側に郷土に関する学習をしているという意識や、その意義が十分に理解されていないのではないか。そこで各教科において、郷土に関する教材を扱う際の意識づけ、また学級、学年、学校単位での郷土意識を高めることを意識した指導を確実に行っていくことが大切。
- ・各教科の年間学習指導計画にも郷土に関する教材を扱う単元を明確にして位置づける。

5. 読書習慣を身につけ、国語の基礎力充実に努めます。

教職員		5				計	教員					集計	達成目標 80%以上		
A	朝の読書時間は一緒に読書するなど自ら範を示し、自分の授業で読書指導や学校図書館の活用を指導または実践し、学活などで読書指導を意図的、計画的に実施している	5				A	2	A+B	6				50	来年度にむけての改善方策案	
B	朝の読書時間は生徒と共に読書し自ら範を示し、学活などで読書指導を意図的、計画的に実施している	5				B	4	%							
C	朝の読書時間は生徒と共に読書しているが、他の時間での読書指導は十分とは言えない	5				C	6	C+D	6				①今年度は、読書が「学力向上」につながるという視点で、朝読書の充実に学校をあげて取り組んだ。選書に指導を加え、学級担任の指導で進めてきた。数値には表れてないが、朝読書が充実しつつある。 ②朝読書が「家庭読書の習慣化」にはスライドしなかった。国語科では、教材の発展学習指導で「読んだ方がいい」ではなく、「読んでどうだったのか」まで踏み込む。 ③唯一、2年(生徒)の「A+B」が高い数値なので、来年度受験になるも落ち込まないよう学年で検討する。 ④(今年度との比較を無視し)項目を変更する。 【教員】 A: 朝読書と一緒に読書し、図書館利用を意図的に行い、効果が見られる。 B: 朝読書と一緒に読書し、図書館利用を時々している。 【生徒】 B: 読書は好きな方で、3ヶ月に一冊くらい読む。 【保護者】 A: 子どもは本が好きで、よく本を読んでいる。 ⑤教員の意識、中学校はどこも停滞中。小学校と異校種間で情報交換し、習って呼びかけ活動をする。		
D	読書指導について十分な指導ができていない	5				D	0	%	50						
生徒		1年	2年	3年	計	生徒					1年	2年		3年	合計
A	読書は好きで、1ヶ月に一冊以上本を読む	A	16	29	8	53	A+B	36	54	20	110				
B	読書は好きなほうで、2ヶ月に一冊くらい本を読む	B	20	25	12	57	%	60	76	38	60				
C	読書はあまり好きではないが、なるべく本を読もうとはしている	C	11	9	18	38	合計								
D	読書は好きではなく、本も学校以外ではほとんど読まない	D	13	8	14	35	183								
保護者		1年	2年	3年	計	保護者					1年	2年	3年	合計	
A	子どもは本が好きで、よく本を読んでいるし、家族でも読書に関する話題を出したりして読書をすすめている	A	8	11	4	23	A+B	34	44	26	104				
B	子どもは本に興味を持っており、家庭でも時々読書している	B	26	33	22	81	%	61	65	53	60				
C	子どもは本にあまり興味関心がなく、読書する姿はあまり見られない	C	16	17	18	51	合計								
D	子どもは本に全く興味がなく、家では全く読書していない	D	6	7	5	18	173								

来年度に向けての具体的提言

- ・読書習慣の形成は学習指導要領にも明記されている重点目標であり、今後とも積極的に取り組んでいきたい。
 - ・一方で学力の向上という大きな目標もあり、限られた朝の時間をどう活用するかという点が課題。
 - ・今年度、朝学習(授業として扱う)と朝読書を学年の発達段階や実態に応じて両立させて取り組んだが、ある程度の効果が得られたと評価できる。しかし家庭での読書習慣の定着にまで至らなかった点を、来年度どう改善するか。以下の視点をふまえてはどうか。
- ①朝学習&朝読書というスタイルは改善しながらも基本的に維持する。
 - ②読書の楽しさを感じる経験を重視し、「読みたい本」を読ませる指導を基本とする。
 - ③朝読書だけでなく、教科での取り組み、学活での取り組み、学校図書館の活用など一層多面的に読書を推進する。

6. 「宿題＋自主学習の習慣化」で家庭学習時間の確保を支援します。

教職員		計				集計							
A	家庭学習の習慣化に向けて具体的な取り組みをすることができ、多くの生徒に望ましい変容が見られた。	6	A	6	合計	A+B	14				達成目標	80%以上	
B	家庭学習の習慣化に向けて具体的な取り組みをすることができ、一部の生徒に望ましい変容が見られた。		滝本	B		8	%	100				来年度にむけての改善方策案	
C	家庭学習の習慣化に向けて具体的な取り組みをしたが、多くの生徒に望ましい変容が見られなかった。		佐竹	C		0	C+D	0				教師側は、家庭学習の習慣化に向け何らかの手だてを講じているが、その手だてが効力を発揮していない生徒が約20%～30%存在するのであろう。 生徒自身と保護者のアンケートの数値がほぼ一致しているのは、生徒・保護者共に自分(我が子)が不十分であることを自覚していると考えられる。教師も、そういう生徒の存在は把握しており、個別指導を試みているが、CをBにするだけの効果が得られていない実態である。来年度以降、さらに保護者と連携を図りながら、きめ細やかな個別指導を推進していく。また、質問を以下のように改訂する。 ◎生徒質問 「A 毎日、家庭学習に取り組み、宿題や自主学習を期限までに必ず提出できている。」「B 家庭学習に取り組み、宿題や自主学習をおおむね期限までに提出できている。」「C 家庭学習をしないことが多く、宿題や自主学習も期限までに提出できない。」「D 宿題があるとわかっていても家庭学習せず、宿題を提出していない。」 ◎保護者への質問 「A 子どもは家庭学習するように言わなくても、自分で取り組んでいる。」「B 家庭学習に取り組むよう子どもに指導しているし、子どももおおむね取り組んでいる。」「C 家庭学習に取り組むよう指導しているが、子どもは取り組もうとしない。」「D 家庭学習をするよう指導をしないし、子どももしない。」という項目に変更する。	
D	家庭学習の習慣化に向けての具体的な取り組みができなかった。		伊東	D		0	%	0					
生徒		1年	2年	3年	計	生徒	1年	2年	3年	合計			
A	毎日、宿題がなくても家庭学習に取り組み、宿題や自主学習を期限までに必ず提出できている。	A	15	18	24	57	A+B	48	52	44	144		
B	宿題があるときは、家庭学習に取り組み、宿題や自主学習を期限までに必ず提出できている。	B	33	34	20	87	%	79	73	85	78		
C	宿題があっても家庭学習をしない日もあり、宿題や自主学習も期限までに提出できない時もある。	C	9	15	7	31	合計						
D	家庭ではほとんど学習することがなく、宿題や自主学習をやらないことが多い	D	4	4	1	9	184						
保護者		1年	2年	3年	計	保護者	1年	2年	3年	合計			
A	子どもはほぼ毎日、一定の学習時間を確保し、精一杯学習に取り組んでいるようだ	A	9	8	4	21	A+B	42	50	39	131		
B	子どもはほぼ毎日、一定の学習時間を確保し、自分なりに頑張っていると思う	B	33	42	35	110	%	75	74	80	76		
C	子どもは家庭学習をする日としない日があり、家庭学習が習慣化していないようだ。	C	12	16	10	38	合計						
D	子どもは家ではほとんど学習をしていないように見える。	D	2	2	0	4	173						

来年度に向けての具体的提言

・質問内容については、「家庭で学習に取り組む習慣がある」と、「期限を守って提出できる」事を切り離した方が、より家庭学習についての実態が明らかになるだろう。また保護者に対しても子どもの家庭学習習慣を定着させるための「協力」を求める質問内容が必要では。ただ年間を通して家庭に協力を呼びかけ、協力体制を作ろうとする取り組みを行うことが前提となる。このことが家庭学習の習慣化をめざす取り組みとして、最も大切なポイントではないだろうか。

○学習支援体制の充実

◎自主・自立の精神と未来を切り拓くたきましさを育てます

○生徒会活動の充実

11. 伝統ある生徒会活動を一層充実させ、望ましい自治意識、自主性、創造性を高めます

教職員		計				集計						
A	子どもの自治意識、自主性、創造性を高めることを意識して生徒会活動に関わり、積極的に活動を指導支援してきた	11	A	9	合計	A+B	14				達成目標	80%以上
B	子どもの自治意識、自主性、創造性を高めるための生徒会活動に対して、必要と思われる指導支援を行ってきた		黒川	B		5	%	93				来年度にむけての改善方策案
C	子どもの自治意識、自主性、創造性を高めるための生徒会活動に対して、最低限の指導支援はできた		中野	C		1	C+D	1				①教員と生徒間で意識のずれがある。輝け角鹿集会、委員会ともに計画通り実施された。来年度は、教員と生徒が一体となって満足成就感を味わえるよう全職員で関わっていく。お便りを活用する。 ②不易(継承)部分を大切にしながら、拡大委員会(風紀&学級のコラボ)等で発表を行う。委員会間で交流を図る。 ③次年度も項目の内容変更は行わない。今年度からの推移を見たい。Dと回答する2年に目をやるが、Cと回答する1・2年をさらに高揚させる。 ④フォークダンスの活性化を、レクリエーション委員会を中心に執行部会で検討していく。
D	子どもの自治意識、自主性、創造性を高めるための生徒会活動に対して指導支援することが殆どできなかった		D	0		15	%	7				
生徒		1年	2年	3年	計	集計						
A	生徒会活動に目的意識を持って自主的、積極的に取り組めた	A	14	18	17	49	A+B	42	55	39	136	①教員と生徒間で意識のずれがある。輝け角鹿集会、委員会ともに計画通り実施された。来年度は、教員と生徒が一体となって満足成就感を味わえるよう全職員で関わっていく。お便りを活用する。 ②不易(継承)部分を大切にしながら、拡大委員会(風紀&学級のコラボ)等で発表を行う。委員会間で交流を図る。 ③次年度も項目の内容変更は行わない。今年度からの推移を見たい。Dと回答する2年に目をやるが、Cと回答する1・2年をさらに高揚させる。 ④フォークダンスの活性化を、レクリエーション委員会を中心に執行部会で検討していく。
B	生徒会活動に目的意識を持ってまじめにしっかり取り組めた	B	28	37	22	87	%	70	79	75	75	
C	生徒会活動に対し与えられた責任だけはしっかり果たした	C	18	10	11	39	合計					
D	生徒会活動に対し消極的な活動しかできなかった	D	0	5	2	7	182					

来年度に向けての具体的提言

- ・「生徒会活動」への参加とは、ただ専門委員会に所属しているかいないかではなく、生徒会の諸活動に協力しているか、協力しようとする気持ちがあるか、という意識や行動を含むものであることが、生徒への質問内容でやや説明不足ではないか。これに限らず、アンケート実施時には、担任からの補足説明が必要との意識も持ちたい。
- ・フォークダンスは無人購買とならんで本校の生徒会活動の伝統であり目玉である。このことを生徒に意識させ、受け継いでいこうとするのならそれだけの意識を持ち、態度で示せるように、という働きかけが来年度、一層必要ではないか。本校の特色ある活動として生徒会活動を位置づけるならば、その特色を生かして生徒を高めようとする教師側の指導が必要であることを再確認し、全校体制で本校の生徒会活動を盛り上げていきたい。

◎豊かな心と健やかな身体の育成を目指します

○道徳教育の充実

16. いじめや差別のない、楽しい学校づくりを生徒と共にめざします。

教職員		計				集計						
A	常に生徒の動向に注意して気になる生徒の様子を把握し、こちらから声をかけて問題の解決に当たったり、「いじめや差別のない集団づくり」について努力している。	16	A	12	合計	A+B	15				達成目標	80%以上
B	気になる生徒の様子を把握し、問題の解決に当たったり、日頃から「いじめや差別のない集団」作りを意識している。		笹山	B		3	%	100				来年度にむけての改善方策案
C	日頃から「いじめや差別」のない学校作りを目指してはいるが、成果が得られたかどうかはわからない。	浜上	C	0	合計	C+D	0				<p>「いじめや差別のない学校づくり」をめざして日々指導しているが、一部の生徒にまだいじめ言動や差別的な行動が見られ、特に2年生にその割合が多い。また保護者についても2年生の保護者の不安が一番大きいようである。そこで次のことに注意して指導する。</p> <p>①いじめ言動や行動に対しては教師が敏感に反応し、行為を見つけたらその場でその行動を注意したり、生徒たちに「その行動についてどう思うか」といじめを見逃さない意識を持たせる。また該当の生徒には継続的に丁寧に個別指導をする。</p> <p>②いじめアンケートや個人ノート等の生徒からのメッセージを読み取り、必要なことには迅速に対応する。</p> <p>③保護者に対しては日頃からこまめに連絡を取って、学校の対応を知らせることとする。</p>	
D	「いじめや差別」のない学校作りを目指して指導してこなかった。	D	0	15		%	0					
生徒		1年	2年	3年	計	生徒						
A	いじめや差別的な発言をしないで、仲間の様子に気を配りながらのしく生活する事ができた。	A	29	7	21	57	A+B	51	44	43		138
B	クラスや部活の仲間の様子に気を配りながら、いじめや差別的な発言をしないよう気がつけた。	B	22	37	22	81	%	85	73	83	80	
C	いじめや差別的な発言をしないよう気はつけていたが、守れないときがあった。	C	8	14	8	30	合計					
D	いじめや差別的な発言について、あまり気にしないで学校生活を送っていた。	D	1	2	1	4	172					
保護者		1年	2年	3年	計	保護者						
A	子どもは、いじめや差別的な発言のない集団で楽しく生活を送っていると思う。	A	25	11	19	55	A+B	45	40	39	124	
B	子どもは、いじめや差別的な発言がほとんどない集団で生活を送っていると思う。	B	20	29	20	69	%	82	61	78	73	
C	子どもから、いじめや差別的な発言が時々あると聞いている。	C	10	26	9	45	合計					
D	子どもから、いじめや差別的な発言が多いと聞いている。	D	0	0	2	2	171	%				

来年度に向けての具体的提言

- ・保護者への質問からは学校生活にいじめや差別があると子どもたちが意識している実態を知ることができる。一方で生徒への質問内容は生徒自身の内面を尋ねている。20%の生徒の発言や態度を問題視した他の生徒が、家庭でその様子を家族に話している様子がうかがえ、家庭でのコミュニケーションが機能していると考えられる。
- ・いじめ問題には、学校、生徒、保護者間の信頼関係が何より大切。今後も情報をオープンにし相互の情報交換を密にする取り組みを一層進める。また生活アンケートなどによる情報収集の取り組みも、今年度(年間2回)実施状況を維持するとともに、必要に応じて随時行う体制をとる。
- ・今年度数件のいじめ問題が発生し対応した実態がそのまま数字に表れていると考えられる。問題の発見、即対応の体制維持は今後も必要だが、いじめや差別のない学校づくりをめざした一層のとらえを実践していかなければならない。

○相談活動の充実

18. ストレスに対処する方法(ストレスマネジメント)や、円滑な人間関係の築き方(アサーション)を学び、将来にわたって役立つ心の強さを育てます。

教職員		計				集計						
A	ストレスマネジメントの授業をしたことがあり、今後も機会があれば行っていきたい。	18	A	8	合計	A+B	13				達成目標	80%以上
B	ストレスマネジメントの授業に興味があり、さらに詳しく知りたいと思っている。		吉田	B		5	%	100				来年度にむけての改善方策案
C	ストレスマネジメントの授業は知っているが、あまり興味がない。		C	0		C+D	0				学級活動の年間計画にストレスについての項目を入れてあったが、実際の取り組みが遅れてしまったので計画通り進める。生徒の中には今まであまりストレスを感じていないという生徒もあり、自分自身の事として捉える事が出来なかったのかも知れない。しかし、今後必ず必要になってくる知識・スキルなので、定期的にストレスチェックを実施して自分の状態に気付かせ、対処法を習得させたい。その他、具体的な取り組みとして考えられること	
D	ストレスマネジメントを知らない。		D	0		%	0					
生徒		1年	2年	3年	計	生徒						
A	ストレスを感じたときには、学校で学んだ対処法(アサーション・リラックス法・呼吸法など)を活用し、役立っている。	A	7	13	10	30	A+B	41	47	38	126	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員対象の研修会を実施する ・保健便りやHPでの情報発信や、学校保健委員会での啓発活動を行う ・オープンスクールでストレスマネジメントに関する授業を行い、保護者の関心も高める ・生徒保健委員会活動においてストレスマネジメントに関することを取り入れ、日常生活の中に学習の機会を設ける等
B	ストレスを感じたときには、学校で学んだ対処法(アサーション・リラックス法・呼吸法など)を活用したことはないが、やってみてみたいと思う。	B	34	34	28	96	%	68	67	90	73	
C	ストレスを感じたときには、学校で学んだ対処法(アサーション・リラックス法・呼吸法など)を活用したいとは、あまり思わない。	C	18	20	4	42	合計					
D	ストレスの対処法(アサーション・リラックス法・呼吸法など)を全く聞いたことがない。	D	1	3	0	4	172					

来年度に向けての具体的提言

・ストレスマネジメントに重点の置いて取り組んできているが、生徒の意識が今一つである。これは生徒側にストレスマネジメントに対するニーズが少ないことが考えられる。しかし一方で対人関係を築いたり維持することが苦手で、円滑な人間関係を維持できないことによるトラブルは後を絶たず、学校生活の大きなストレスになっている。そこでソーシャルスキルトレーニングやアサーショントレーニングにより比重を置いた取り組みにより、ストレスを発生させないためのスキルアップに取り組む視点を検討する必要があると考えられる。

19. スクールカウンセラーや相談機関の存在と役割を広く伝え、一人一人の生徒を幅広く支援する体制をとります。

教職員		計				集計						
A	困ったことがあったら、スクールカウンセラーや相談機関に相談したことがある、または相談したいと思ったことがある。	19	A	8	合計	A+B	15				達成目標	80%以上
B	機会があればスクールカウンセラーや相談機関に相談したいと思っているが、今のところ困っていることはない。		吉田	B		7	%	100				来年度にむけての改善方策
C	困ったことがあっても、スクールカウンセラーや相談機関に相談したいとは思わない。		C	0		C+D	0				SCの先生と面談したことがある生徒・保護者がいる一方で、約1割の生徒がSCが来校していることを知らず、保護者においても相談出来ることを知らないと回答している。例年1年生対象にグループエンカウンターの実施し、指導もして下さっているが、まだまだ認知度が低いといえる。実際に相談するしないは別としても、SCの事は全生徒・保護者が周知しておく必要があるため、広報活動に力を入れていきたい。具体的には ・日程があれば年度当初の全校集会や学年集会で紹介する ・授業に参加してもらう回数を増やす ・学級の様子を参観してもらう ・相談室便りやHP等で紹介する 等	
D	スクールカウンセラーや相談機関は必要がないと思う。		D	0		%	0					
生徒		1年	2年	3年	計	生徒	1年	2年	3年	合計	また、生徒のCの評価項目が曖昧で回答しにくいとの指摘があったので、その点については改善したい。 →「悩みや困っていることはないが、スクールカウンセラーの先生に相談できることを知っている」	
A	教育相談の時などに、先生方やスクールカウンセラーの先生に悩みや困っていることを相談したことがある。	A	8	16	6	30	A+B	31	44	32		107
B	教育相談の時などに、先生方やスクールカウンセラーの先生に悩みや困っていることを相談したいと思ったことがある。	B	23	28	26	77	%	52	68	63		61
C	教育相談の時や休み時間などに、先生方やスクールカウンセラーの先生に相談できることを知らない。	C	22	14	17	53	合計					
D	スクールカウンセラーの先生が来て下さっていることを知らない。	D	7	7	2	16	176	%				
保護者		1年	2年	3年	計	保護者	1年	2年	3年	合計		
A	子どものことで困ったことがある時に、必要があればスクールカウンセラーや学校外の相談機関に相談したい。(したことがある。)	A	11	7	13	31	A+B	45	56	43	144	
B	子どものことで困ったことがある時に、必要があればスクールカウンセラーや学校外の相談機関に相談できることを知っている。	B	34	49	30	113	%	83	85	88	85	
C	子どものことで困ったことがある時に、必要があればスクールカウンセラーや学校外の相談機関に相談できることを知っているが、ためらいがある。	C	7	6	5	18	合計					
D	子どものことで困ったことがある時に、必要があればスクールカウンセラーや学校外の相談機関に相談できることを知らない。	D	2	4	1	7	169					

来年度に向けての具体的提言

・生徒がスクールカウンセラーの存在をより身近に感じ、気軽に相談できる体制作りを目ざしているが、なかなか認知度があがらない実態がある。提案されている4点の取り組みに加え、相談室に設置されている電話を活用した相談なども検討するとともに、学級、学年、学校それぞれの便り、学級懇談やPTA総会、部活動保護者会などの機会を捉えた広報・啓蒙活動の一層の充実を目ざす。

○部活動の推進（文化部・運動部の特性を生かす）

20. 豊かな情操, 強い身体, 協調, 共同の精神を育てます。

教職員		計				集計						
A	部活動全体が共通の目標に向かって努力し、また生徒同士の励まし合う姿が見られる。	20	A	7	合計	A+B	11				達成目標	80%以上
B	部活動全体が共通の目標に向かって努力し、生徒同士の声掛け合いが見られるようになってきた。		平井	B		4	%	73				来年度にむけての改善方策案
C	部活動全体が共通の目標に向かって努力しているが、自己のことで精一杯の状態である。		部活顧問	C		4	C+D	4				部活動ミーティングを年3回程度実施し、部員や顧問の意思疎通の場とし、部活動内の問題点の改善や目標の明確化を図る。 また、部活動顧問会も定期的にも実施し、意見交換や問題点改善に努める。
D	部活動全体が共通の目標に向かっておらず、努力も感じられない。			D		0	%	27				
生徒		1年	2年	3年	計	生徒						
A	部活動全体の目標を理解し、全員が同じ気持ちで取り組んでおり、仲間への励まし合いもある。	A	42	46	44	132	A+B	52	56	48	156	
B	部活動全体の目標を理解し、全員が同じ気持ちで活動できているが、仲間を励まし合う余裕まではない。	B	10	10	4	24	%	87	79	92	85	
C	部活動全体の目標は理解しているが、今は自分自身のことで精一杯である。	C	7	10	3	20	合計					
D	部活動全体の目標がわからず、どんな努力が必要かも今一わからない。	D	1	5	1	7	183					
保護者		1年	2年	3年	計	保護者						
A	部活動全体の様子がわかっており、仲間への思いやりも感じられる。	A	27	25	31	83	A+B	50	60	44	154	
B	部活動全体の様子がわかっており、全員で同じ活動ができていることが感じられる。	B	23	35	13	71	%	93	91	90	91	
C	部活動全体の様子がわかっているが、自分自身がついて行くことで精一杯の状態である。	C	2	3	3	8	合計					
D	部活動全体の様子が伝わらず、前向きに活動できているのかが疑問である。	D	2	3	2	7	169					

来年度に向けての具体的提言

- ・部活動ミーティングは各部活動ごとに必要に応じて随時設定されているので、全体で一斉に行うのは年2回でよい。
- ・部活動がめざすもの、目標を明確にし、常に意識させることも大切。部活動掲示板の活用や、部活動保護者会の一層の充実などによって、教師自身も納得できる部活動指導をめざしていきましょう。それによって生徒、保護者の評価も一層高まっていくと考えられる。